# 刀装具における画題の選定意識の変化 ―無銘「蜂図」目貫―

伊藤三平

## はじめに

刀装具の画題は、刀を身につける武士や帯刀を許された上層町人の嗜好や教養を反映したものが主である。今回は写実的だが、かわいらしい蜂の目貫から、昆虫や魚類の写実的な作品が画題となった時代背景と、それらが西洋のアールヌーボーの芸術潮流に影響した背景と同時に、現在の世界に広まっている日本の「かわいい文化」の源流を考えてみたい。

## 1. 無銘「蜂図目貫」

この作品は無銘であり、作者は不明である。素銅地に蜂の姿態をよく写し、赤銅の平象嵌で要所の模様を表現している。ただし目玉を寄り目的に赤銅の線で表現した点や、羽の先の丸味、脚の開き方、触覚の太く丸い表現などから、かわいらしさを感じさせる。

同様の目貫に土屋昌親在銘品（左図参照。「刀和」平成20年2月号所載）があるが、目玉は丸く、羽の脈は彫りで表現しているようで、小異がある。

昆虫の画題と、平象嵌の技法から村上如竹一派の作品とも考えられるが、如竹の蜂図縁頭とは印象が異なる（左図参照。『緑青』34号、清水三年坂美術館蔵）。如竹は特色である緋色銅（ややくすんだ赤色の合金）を使用し、対象をはみ出るほど大きく据えている。

この蜂目貫と同様な作品を巷で数点観たことがあり、在銘品も現存している可能性もあるが、この時点では、製作時代は土屋昌親と同時代の幕末で、昌親一派や如竹門流の影響を受けた金工ではないかと考えている。

## 2. 蜂の画題

武士の道具類に昆虫文様が登場することは古くから存在する。蜻蛉は前にしか進まないから勝虫の異称が付けられて愛好されている。蟷螂も「蟷螂の斧」ではないが、強い者にも勇気をふるって立ち向かうところを愛されている。百足は凶暴で攻撃性が高いとか絶対に後ろに下がらない、脚が多い＝兵が多いなどの連想で使われている。『小柄百選』（長谷川赳夫、藤井正宣著）には顕乗の「蟋蟀図」や政随の「老木に蝉図」の小柄が関連する漢詩、謡曲と共に掲載されている。また蝶は平氏の紋であり、縁のある武家は紋所にしている。

蜂も社会性を営みながら、針で相手を攻撃する強さもあり、旗差物の絵柄で見たことがあるが、多くはない。むしろ、蜂の場合は音読みの〝ほう〟を「封」として領地に御縁があるようにとの願いを込めて画題にされているのを見かける。「蜂に猿」を組み合わせた図柄では、猿は猿猴であり、猴を侯に置き換えて〝封侯〟と言う意味となる。「蜂に鹿」で〝封禄〟となる。蜂の〝ほう〟を「報」と置き換えて「蝸牛に蜂」で〝果報〟とする語呂合わせの縁起担ぎもある。



隔月刊「刀和」第416号　令和8年5月1日発行（隔月1回1日発行）

## 3. 生物の写実

生物が刀装具の画題となるのは前章で説明したように、それが武家好みの特性を具備しているとか、武家の愛好物（鷹、馬）、十二支の動物、竜虎、登竜門の鯉、鶴亀の縁起物、吉祥への語呂合わせ、神仏との縁（摩利支天と猪、八幡信仰と鳩、寿老人と鹿、恵比寿に鯛など）、慣用的画題（竹に虎、猫に牡丹、梅に鶯など）などからであった。西洋画の鑑賞でもアトリビュート（持ち物から持ち主を特定するもので、例えばユリの花は聖母マリアなど）の知識は不可欠である。それが江戸時代の後期になると生物そのものに関心が向けられている。

### (1) 精緻な生物の絵は本草学から

植物、動物、鳥、魚、昆虫の詳しい生態に関心が向けられたのは、本草学の発達によるところが大きい。当初は役に立つ医薬品の知識を習得する為に医師が関心を寄せ、中国の明代の『本草綱目』を参考に『大和本草』（貝原益軒、宝永6（1709）年）が刊行される。もう一つの潮流は、徳川吉宗が殖産事業を興すために、各藩領内の産物を調べて把握するための調査であり、『諸国産物帳』が享保の末年（1736年頃）に編纂された。これらが端緒となって、本草学は上層階層にも広まる。円山応挙の写実絵の端緒となった三井寺円満院祐常門主は知られているが、大名間にも広まり、著作を残している大名もいる。その中では高松藩主松平頼恭の編纂した『衆鱗図』（宝暦年間1751～1764）は全4帖に魚類などの水生生物723点が生き生きと細部まで精緻に描かれている。また伊勢長島藩主増山正賢（雪斎）は自ら絵を画き、昆虫類を『虫豸帖』（文化4～9（1807～1812）年頃）として画帖にまとめている。蜂は「秋」の部に4ページに渡って写生されている（左図参照、国立博物館蔵）。また1830年代には近江宮川藩主堀田正民が昆虫類を描いた『蜻蛉譜』や『雑虫二十五種』を上梓している。なお昆虫では本草学者栗本丹洲の『千蟲譜』（文化8（1811）年序）も見事な本である。原本は失われているが、多くの虫類を網羅し、精緻で彩色も美しいので写本がいくつか現存している。この目貫と同じ姿態は探せていないが、金工が下絵の参考にしたのではなかろうか。庶民の芸術の浮世絵においても、狂歌師が虫に因んで詠んだ狂歌と一緒に虫を描いた喜多川歌麿の『画本虫撰』が天明8（1788）年に刊行されている。ちなみに江戸で「スズムシ売り」の商売をはじめたのは越後出身のおでん屋忠蔵で寛政年間（1789～1801）からとされている。

### (2) 刀装金工の画題としての生物

こういう時代になると生物そのものが武との関連、縁起、伝承等を放れて「おもしろいじゃないか」と刀装具の画題に登場することとなる。このような軽い感想は下地となる教養とは無縁な近代の意識だと思う。特に魚類は多く、紙幅の関係で作品は紹介しないが、岩本昆寛（1744～1801）と岩本派諸金工、村上如竹派金工など18世紀後半以降の金工が見事な写実作品を残している。昆虫は魚類ほど多くないが、村上如竹の蜻蛉、蝶などの作品はデザインも見事である。

## 4. ジャポニスムとアールヌーボー

日本の金属工芸品や、浮世絵、漆器、陶器、着物などが明治維新の開国によって西洋に紹介された19世紀後半から、ジャポニスムと称される日本ブームが巻き起こる。日本美術で取り上げられた画題としての野辺の花や小さな動物や昆虫も新鮮な驚きをもたらした。西洋では、画題も人間の姿を最も重要と考えており、自然は物語の舞台背景、あるいは人間の支配下に置かれた静物として描かれてきた。

野辺の花や昆虫などの小さなモチーフは、特に工芸家によって取り入れられ、これら自然界のデザインを元に、流れるような曲線、繊細で優雅な装飾が特色の製品を制作した。エミール・ガレはガラス製品、ルネ・ラリックは宝飾品にこれらの画題を取り入れている。この芸術上の流れをアールヌーボー（新しい芸術）と称している。折しも19世紀末から20世紀初頭に、産業革命による大量生産品への反発もあったともされている。

## 5. 「かわいらしさ」の伝統と世界への広がり

この蜂の目貫は忠実な写実というより「かわいらしく」デフォルメしている。対象物がそもそもかわいらしい犬（特に狆）を描いた円山応挙の画や刀装具（「刀和」396号で紹介した柳川直光の狗児図目貫）はあるが珍しいものである。玩具を彫った遅塚久則（「刀和」400号で紹介）の作品もかわいらしくはない。そこで「かわいらしさ」について考察した。

### (1) 日本人の「かわいらしいもの」を愛でる文化

日本では平安時代から、子どもの無邪気さやあどけない仕草などの母性本能をくすぐるような愛らしさや、心惹かれる小さな動植物に目を向けている。『枕草子』でも「うつくしきもの」＝「かわいらしいもの」として、幼児の仕草やスズメの子がチュッチュッと跳ねて来る仕草などを列挙している。同じ意味の形容詞として「愛らしい」「いじらしい」などがある。

こうした感情は人類共通と思うが、『かわいいジャポニスム』（沼田英子著）によると、西洋では、強く逞しいものや崇高なものに美を求めてきており、小さくて儚げなものや、素朴で心安らぐものを愛でるという感性はあまり尊重されてこなかったと記している。その理由は美術に大人の文化を求めてきたからとされる。今の日本の若い女性は何に対しても「かわいい」を発するが、我々の世代では「かわいい」は幼いもの、小さいもの、愛嬌のあるものに対して使う言葉であり、成人や立派な作品に対して使うのは失礼という意識を持っている。

### (2) 絵画表現としての「かわいらしさ」の出現

日本での絵画表現として「かわいらしさ」はいつ頃からあるのかと調べたが、まとまった資料は私の調査不足もあるが見つからない。美術関係者の中には、近代に西洋から移植された価値観に支配された鑑賞眼で日本の美意識としての「かわいらしさ」を認定できなかったのではと反省する人もいる。また個人によって「かわいらしさ」の感じ方が違うことに起因するのかとも思う。「鳥獣戯画」を「かわいい」と思う人もいるが、「おかしみ」を感じる人もいる。動物そのものの姿態がかわいい子犬、鹿、猿、猫、鼠などを画題にすれば、ある意味でかわいいが、その要素を強調した画は江戸時代の後期の応挙、蘆雪などの子犬の絵などからではなかろうか。

### (3) 「かわいい文化」の世界への広がり

この文化は1980年代後半から少女文化として認知されはじめるが、マンガやアニメやサンリオのキャラクターが世界に普及するに連れて2010年頃から世界に広まり、今や「かわいい」は「現代の世界で最も広まった日本語」とも言われている。全体に丸まった姿のキャラクターが「かわいい」マスコットとして世界中に広まっている。

一般大衆に広く愛好される文化はポップカルチャーと称される。そして一般大衆の方が圧倒的に数は多い。その為に、従来の美術や音楽、文学などのハイカルチャーの文化を席捲して融合されつつあるのが現状である。日本の現代美術家の村上隆、奈良美智が世界で評価されている一因ではなかろうか。国もクールジャパン（格好いい日本）の一環として「かわいい文化」の普及に力を注いでいる。次のジャポニスムになるのであろうか。